

保育唱歌におけるフレーベル主義

—作曲家宮内省式部寮雅楽課伶人の立場から—

東 ゆかり（初等教育学科）

Froebelism and Hoiku Shoka: From the Perspective of the Reijin from the Gagaku Department of the Court Ministry Responsible for Musical Composition

Yukari Azuma

Department of Primary Education, Kamakura Women's University Junior College

Abstract

The aim of this study is to examine the creative process of Hoiku Shoka from the perspective of the Reijin, members of the Gagaku Department of the Court Ministry, who were engaged in its composition. The study was conducted by analyzing autographed manuscripts written by Fuyu Toyoda, a teacher at the Tokyo Women's Normal School Kindergarten who worked as a translator and lyric writer during the early Hoiku Shoka period. Originally, Hoiku Shoka began as a collection of educational songs for kindergarten instruction. It then started being used for various purposes, such as for Tokyo Women's Normal School students or unspecified audiences at concerts. The study reveals that the music composition quality underwent changes under the circumstances.

Key words: Hoiku Shoka, Reijin, Gagaku, Fuyu Toyoda

キーワード：保育唱歌、伶人、雅楽、豊田英雄

はじめに

日本で最初に設立されたフレーベル式幼稚園である東京女子師範学校附属幼稚園は、幼稚園開設当初唱歌教材が無かったことから、宮内省雅楽局の式部寮雅楽課伶人に唱歌の作曲を依頼し、「保育唱歌」が作成された¹⁾。この唱歌の作成には東京女子師範学校附属幼稚園の保母も携わり、明治10年（1877）11月3日に遊戯唱歌「風車」の改訳が式部寮へ提出され、11月6日から式部寮伶人による保母らへの唱歌指導が開始された。

11月13日に「皇后宮東京女子師範学校行啓ノ節演奏ノ歌曲伝授ノ為伶員派遣願ノ件」が東京女子師範学校摂理中村正直より式部寮へ送られ、その日のうちに東儀季熙撰譜の「風車」「冬燕居」が上申され、翌11月14日には、「風車（遊戯）」と「冬燕居（唱歌）」の墨譜が回附された。11月27日には皇太后と皇后宮行啓による盛大な開業式がおこなわれたが、この時披露された園児と保母による遊戯唱歌は皇太后と皇后をたいそう感激させた。そして、この時披露された「風車」と「冬燕居」

が、保母の訳詞と伶人の作曲による最初の「保育唱歌」となった。

これまで筆者は、初期の「保育唱歌」の訳詞や作詞をおこなった豊田英雄が書き残した自筆の文書の解説を通して、保母である豊田の側からの「保育唱歌」成立過程の研究をおこなってきたが、本研究では、作曲者としての宮内省雅楽課式部寮伶人たちの立場からの「保育唱歌」について検討をおこなった。なお、本研究で使った豊田英雄の自筆の文書①、文書②、文書③、文書④は、豊田の曾孫であり文書の所有者である高橋清賀子氏の許可を得て、2012年2月20日・21日に茨城県立歴史館資料室にて筆者が撮影をおこなったものである。

1. 宮内省雅楽局式部寮雅楽課の設置

明治3年(1870)11月、宮内省に雅楽局が設置された。それまで京都の三方楽所に所属し宮廷や寺社との結びつきの中で雅楽に携わってきた楽人は、雅楽局の設置により明治新政府の官員である「伶人」となった。そのうちの約半数が京都・奈良・天王寺・紅葉山の楽所から東京に集められ、明治4年(1871)、宮内省式部寮雅楽課が組織された。

2. 式部寮伶人たちと西洋音楽

明治6年(1873)、国賓イタリア皇族ゼーン公に対する午餐会で、海軍軍楽隊が宴中にはじめて西洋音楽を演奏した。その一方で、国賓接遇にはもてなしの趣向の一つとして自国の伝統的な音楽や芸能が重視されたため、日本の伝統音楽である雅楽を扱う式部寮の伶人たちが、明治7年(1874)12月、「欧州楽伝習の儀」により正式に西洋音楽を学ぶことになった。明治9年(1876)11月3日の「明治天長節」に、伶人たちによる古例の舞楽に代えての欧州吹奏楽が公式宴会ではじめて披露された。その後、明治10年代に入ると官立諸学校の開校式や卒業式における奏楽の依頼が来るようになった。明治10年(1877)10月26日、殖産興業推進目的の第1回内国勸業博覧会が開催された。上野公園で大勢の見物人のための余興演奏として、式部寮伶人と海軍軍楽隊が奏楽を依頼された。このことが、不特定多数の聴衆の前で伶人

が西洋音楽を演奏する最初の出来事となった。さらに、同年11月27日、天皇の大臣や参議らとの陪食(身分の高い人と一緒に食事をする)が定例化され、陪食の席で雅楽と西洋音楽(吹奏楽)を伶人と軍楽隊が交互に演奏するようになった。

3. 伶人たちの学んだ西洋音楽と保母達への伝習

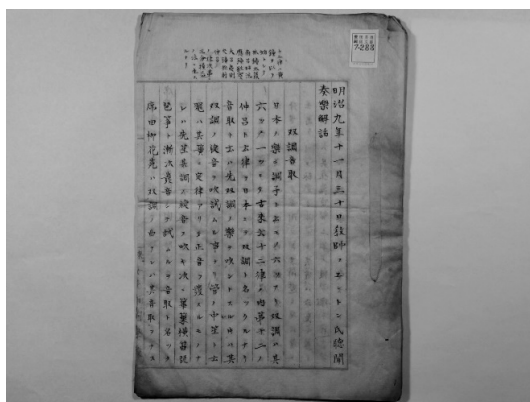
式部寮は海軍省に西洋音楽教授を依頼し、手始めに雅楽譜と異なる西洋音楽の楽譜の読み方を学ぶため、明治7年(1874)12月22日から「譜学伝習」が開始された。伶人たちは海軍軍楽隊の楽隊屯所に連日通い、楽長長倉祐庸から楽譜の読み書きを学んだ。さらに式部寮は、明治9年(1876)3月、当時海軍軍楽隊指導者であったフェントン(Feinton)を共雇いとし、フェントンの伶人への伝習は翌年明治10年(1877)3月までの1年間続いた。フェントンとの契約期間が過ぎた後は、明治20年にエッケルトを雇い入れるまでの10年間、外国人からの伝習はおこなわれなかった。

ところで、明治7年(1874)12月の「欧州楽伝習の儀」により正式に西洋音楽を学ぶことになった式部寮伶人たちがどのような伝習を受けたのかについて、その一端を知ることができる豊田の自筆文書(もんじょ)が残されている。

冒頭で述べたように、明治10年(1877)11月6日より伶人による保母たちへの唱歌指導が開始されたが、文書①は、明治9年11月30日に伶人がフェントンから受けた伝習を豊田が書写したものである。

【文書①】

「双調音取(教師フェントン氏聴聞奏楽解話)」



また、文書②は、明治11年と日付の書かれた三十葉の唱歌の綴りに添えられているものである。切れ端のような和紙に書かれており、唱歌が掲載されている綴りの束に紐で一緒に結んで保存されていたものである。

【文書②】「唱歌三十葉」

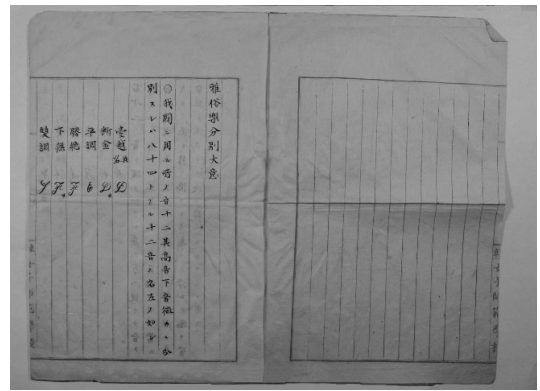


このメモにはピアノの鍵盤の絵が描かれており、鍵盤に「C D E F G A B C」「D L M F S R C D」「ドレミハソラシ(ド)」「宮 商 角 嬰角 徴 羽 変宮 宮」の文字が記されている。そして、「ドレミは我五音なり。その施り(めぐり)は半呂半律にして角に嬰声を生じ宮に変宮を生じて七音をなすなり。右の施りをもって CDEFGAB いづれかを宮、すなわちドとなすとも妨ぐるなかるべし。」と書かれている。これは伝習の言葉をそのまま記したものと思われるが、この内容は、塚原(2009)、吉田(2011)の研究で述べられている明治11年9月発行の岩田通徳『音律入門』の理論に基づく講義内容と一致するものである。

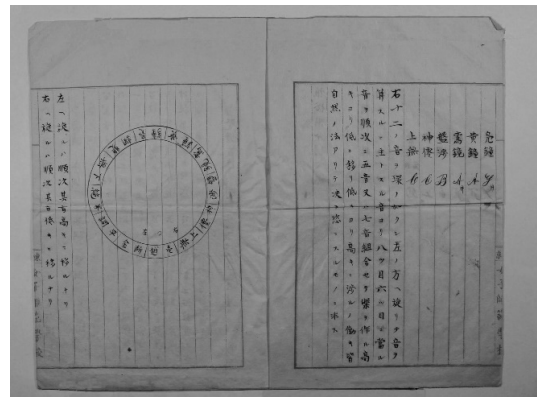
また、文書③、文書④「雅俗分別大意」には、塚原(2009)が著書『明治国家と雅楽』の中で紹介している宮内省書陵部・谷森善臣本の中に収められている「音旋指掌図」、芝葛鎮旧蔵資料の中に収められている「呂律輪転図」と思われる円形の図、律旋と呂旋、中国十二律名の日本式呼称(壹越・断金・平調・勝絶・下無・双調・鳧鐘・黄鐘・鸞鏡・盤渉・神仙・上無)等が記されている。このように、保母たちには、西洋音楽、雅楽(宮廷音楽)と俗楽(民謡などの庶民の音楽)と

いった幅広い理論伝習がおこなわれていたことがわかる。

【文書③】「雅俗分別大意」



【文書④】「雅俗分別大意」



これらの豊田の自筆文書を見ると、保母たちが伶人から受けた伝習は、かなり高度な内容のものであったことが伺われるが、なぜ保母たちへこのような伝習がおこなわれたのだろうか。

曾我(2008)、塚原(2009)の『雅楽録』の研究の中で、①明治11年2月15日、東京女子師範学校、唱歌の科を実施。幼稚園保母、暫定的に唱歌の教員を兼ねる。②明治11年2月23日、「日課奏楽ノ為幼稚園保母稽古所へ来所ノ件」雅楽課から式部寮へ依頼。③明治11年9月19日、東京女子師範学校本科の唱歌指導、保母に代わって伶人がおこなう(月曜と木曜)、ことが明らかにされた。つまり、豊田たち保母は、日々の保育の中での唱歌遊戯のみならず、明治11年2月から暫定的に東京女子師範学校の唱歌の教員を兼ねることになり、

そのために必要な高度な伝習がおこなわれていたのであった。

4. 伶人と洋琴（ピアノ）

明治11年（1878）11月、芝葛鎮が三条実美公に伶人の洋琴伝習について相談をもちかけた。そして、「近来音律の調査のため外国人から雅楽稽古所への照会も増え、伶人も西洋音律の大略を心得る必要があること」「フェントンから習った吹奏楽は西洋でも特別のもので、一般にはピアノオルガンが広く流布しており、西洋人は多くの場合この二つの楽器によって音律を論ずるため、伶人にとっても伝習が必要であること」を理由に、明治11年11月30日、式部寮から伶人の洋琴（ピアノ）伝習が上申された。この上申は認められなかったが、それでも洋琴の伝習が必要であった伶人たちは、三條家のピアノを借りて自主的に東京女子師範学校附属幼稚園主席保母の松野クララによるピアノ伝習を開始した。その後再び上申をおこない、明治12年3月14日付で式部寮における伶人の洋琴伝習が正式に許可された¹⁰⁾。

再上申の理由には、音律之調査だけでなく新曲撰譜のためにピアノが必要であることが述べられている。伶人自らが洋琴（ピアノ）を学習することで、唱歌の撰譜の際にピアノが用いられるようになり、それまで墨譜で作成されていた保育唱歌はピアノ譜で作成することも可能となった。雅楽を専門とする伶人が、自ら進んで積極的にピアノを習い、音楽活動に幅を広げていたことがわかる。

再上申が許可されて、明治12年（1879）3月19日、芝葛鎮、東儀季芳、奥好義、小條秀一の4名のピアノ伝習が申し付けられた。指導者は東京女子師範学校附属幼稚園主席保母の松野クララであった。このことにより、松野クララは我が国最初の官庸ピアノ教師となったが日本語を話せなかったため、クララの夫で当時内務省御用掛であった松野礪が通訳をおこなった。

塚原（1996）によると、4名のピアノ伝習が開始されてまもなく、当時44歳であった東儀季芳が「何分操手不自由ニテ精密之調査難出来」として同年5月22日付で伝習から外れ、代わりに五等伶

人の辻則承が加入したことが明らかにされている。式部寮における伶人の伝習は、伝習を受けていた芝葛鎮、奥好義、辻則承の3名がこの後に文部省御用掛となって音楽取調掛で洋琴を学べるようになったため、式部寮での洋琴（ピアノ）伝習は明治14年6月27日付で休止となった。

5. 式部寮伶人たちによる自主活動「西洋管絃楽協会」の発足

宮中での奏楽を本来の仕事としている伶人の間で、吹奏楽による演奏が室内で行われる饗宴の場にふさわしくないという考えが広まり、明治12年に伶人たちの自主活動のかたちで管絃楽の研究が開始されることになった。これは、陪食や宴会等の場で、従来の吹奏楽ではなく、室内での奏楽に適した管絃楽を用いるべきという考えに基づくものであった。

明治12年（1879）12月16日、芝葛鎮、小條秀一を発起人とする伶人の自主活動「西洋管絃楽協会」が発足し、そこで西洋管絃楽の研究がおこなわれた。メンバーには当時式部寮で西洋音楽伝習に加わった伶人全てが含まれていた。塚原（1996）によると、式部寮の中で保育唱歌の撰譜にあたった伶人は24名おり、その中の林広守・上真節・東儀頼玄・奥行業の4名を除く20名は、この西洋音楽伝習に加わった伶人たちであった。

6. 伶人にとっての保育唱歌の位置づけの変化

伶人達が吹奏楽を室内の饗宴の場にふさわしい演奏形態ではないと考え始めた時期は、丁度保育唱歌の上申が盛んに行われていた明治11年から明治12年の時期と重なっている。また、伶人にとっての保育唱歌の位置づけが、東京女子師範学校附属幼稚園の保育のための唱歌から、公開演奏会のプログラムへとその適用の範囲が拡大されていった時期とも重なっている。

以下の表は、塚原（1996）が『豊原喜秋記』と『雅楽録』、『明治天皇記』を基に作成した「伶人欧州楽奏楽表（明治九年～二〇年）」の全プログラムの中から保育唱歌だけを抜き出したものである。

【表1】「伶人欧州楽奏楽表（明治九年～二〇年）」の保育唱歌一覧

明治13年	
4月24日	楽舞大演習 雅楽稽古所 指揮者：小篠秀一 保育唱歌（幼稚園生徒24名による）冬燕居・遊行・園之遊・民草 （東京女子師範学校生徒21名による）春日山・菊ノ插・花橘・寒夜
4月25日	楽舞大演習 雅楽稽古所 指揮者：小篠秀一 保育唱歌（幼稚園生徒32名による）筈・隅田川・野山ノ遊・風車 （東京女子師範学校生徒22名による）天ノ田鶴群・元ハ早苗・オモウトチ・不二ノ山
10月30日	楽舞大演習 雅楽稽古所 指揮者：小篠秀一 保育唱歌（東京女子師範学校生徒18名による）百鳥・ササレイシ・山時鳥・白金
10月31日	楽舞大演習 雅楽稽古所 指揮者：小篠秀一 （東京女子師範学校生徒18名による）秋ノ日影・竹ノ根・白雲・浜ノ真砂
明治14年	
11月5日	楽舞大演習 雅楽稽古所 指揮者：林広季 保育唱歌 菊ノ插・秋ノ日影
11月6日	楽舞大演習 雅楽稽古所 指揮者：林広季 保育唱歌 冬ノ円居・不二ノ山
明治15年	
4月22日	楽舞大演習 雅楽稽古所 指揮者：多久随 保育唱歌 白金・花橘・山下水
4月23日	楽舞大演習 雅楽稽古所 指揮者：林広季 保育唱歌 オモウトチ・コカヒ
11月18日	秋季楽舞大演習 雅楽稽古所 指揮者：芝葛鎮 保育唱歌 神ノ道・コホロギ
11月19日	秋季楽舞大演習 雅楽稽古所 指揮者：芝葛鎮 保育唱歌 竹ノ根・フルヌルフミ
明治16年	
5月2日	春季楽舞大演習 雅楽稽古所 指揮者：林広季 保育唱歌 春ノ山辺・伊呂婆
5月3日	春季楽舞大演習 雅楽稽古所 指揮者：林広季 唱歌 万ノ事・君ヶ恵
11月14日	秋季楽舞大演習 雅楽稽古所 指揮者：芝葛鎮 唱歌 ヨサム・唐琴
11月15日	秋季楽舞大演習 雅楽稽古所 指揮者：芝葛鎮 唱歌 カヒアル千代・梅ノ花
明治17年	
5月6日	春季楽舞大演習 雅楽稽古所 指揮者：林広季 唱歌 二見ノ浦・百鳥
5月7日	春季楽舞大演習 雅楽稽古所 指揮者：芝葛鎮 唱歌 苗代水・山時鳥
明治19年	
10月27日	楽舞演習 雅楽稽古所 指揮者：芝葛鎮 唱歌 河水・明石ノ浦
明治20年	
6月1日	雅楽稽古所臨時演習 雅楽稽古所 指揮者：芝葛鎮 唱歌 倭心・家鳩

これによると、明治9年から明治12年の間、公開演奏会で唱歌は演奏プログラムに含まれていなかった。吹奏楽や管弦楽、舞楽等と共に唱歌がプログラムに取り上げられたのは明治13年4月24日であった。その後、雅楽稽古所の会場における楽舞大演習のプログラムとして、多くの聴衆の前で保育唱歌が披露されることとなった。

おわりに

明治13年4月24日、25日の2日間に渡りおこなわれた楽舞大演習では、東京女子師範学校附属幼稚園の園児と東京女子師範学校生徒が保育唱歌を披露したことが記されている。この時に演奏された「冬燕居」「風車」は、保母の訳詞と伶人の作曲による最初の「保育唱歌」であった。

国文学者の金田一春彦氏は、金田一・安西『日本の唱歌（上）明治篇』の中で、「風車」について「歌詞は口語では品を落とすと思って文語で和歌の形式をとって作ったものと思われるが、なるべく子どもにわかりやすく、題材と表現を考えたあとが見え、ほほえましい。曲は雅楽の律音階で、催馬楽の曲を単純化した趣があり、おもしろい。たわいないものであるが、はじめて作る子どもの教育的な歌とあっては苦心したものであろう。」ⁱⁱⁱ⁾と述べている。そこには最後まで「作者不詳」で上申され続けていた作詞者豊田英雄の密やかな貢献の跡が伺える。また、明治20年6月1日に選曲された「倭心」は、最後まで上申されなかった「作者不詳」の唱歌の1曲であり、「家鳩」は倉橋惣三が著書『日本幼稚園史』の中で豊田の作であることを記している遊戯歌である。同年7月には文部省音楽取調掛編纂『幼稚園唱歌集』が刊行されるに至ったが、共に「保育唱歌」作成に携わってきた伶人は、「保育唱歌」の本来の役割と「保育唱歌」における豊田の功績を理解していたのではないだろうか。

注

i) 以下のものは、芝葛鎮筆「保育唱歌上下」と芝祐夏筆「保育唱歌墨譜本」をまとめた芝祐泰著『保育並遊戯唱歌の撰譜』（pp.20-31）、および塚原（2009）、

曾我（2008）、藤田（1978）の研究を照らし合わせて作成した保育唱歌一覧である。上申日から順に、曲名、調と旋法、「唱歌・遊戯歌」の種類、作詞者、引用された原著名とその曲名を記している。曲名に記された○と△の印は『保育並遊戯唱歌の撰譜』の記載によるものであり、本一覧ではそのまま転記した。（東ゆかり 2016 保育唱歌におけるフレーベル主義－豊田英雄の文書を中心に－『鎌倉女子大学学術研究所報』第16巻 pp.31-41. より）

明治10年	唱歌遊戯ノ 諸曲墨譜撰成伺 上申ノ年月 左二記ス 但墨字ハ唱歌 朱字ハ遊戯 ノ歌ナリ
11月13日	風車（ㇿ律）（遊戯歌）（作詞者不詳） （Ronge, Peabody, Douai, The Windmill） 冬燕居（盤律）（唱歌）（作詞者不詳） （Douai, Winter）
12月	○寒夜（盤律）（唱歌）（作詞者不詳） （Douai, Winter） ○秋ノ日影（平律）（唱歌）（露霜）（作詞者不詳） ○百鳥（双呂）（唱歌）（作詞者不詳） （Douai, Birds） ○家鳩（平律）（遊戯歌）（作詞者不詳） （Ronge, Peabody, Douai, The Pigeon-house） ○兎（平律）（唱歌）（作者不詳） ○遊魚 黄律（遊戯）（作者不詳）（Ronge, Peabody, Fishes）
明治11年	明治十一年五月九日保母ヨリ請求ニ依テ 和琴ヲ附シ唱歌ノ部ニ入ル
2月22日	○チチコソ（ㇿ律）（唱歌）（作詞者不詳） ○ハハソバ（平律）（唱歌）（Douai, from the kindergarten） ○我行末（双呂）（唱歌）（作詞者不詳） ○花橘（黄律）（唱歌）（作詞者不詳） ○河水（盤律）（唱歌）（作詞者不詳） ○遊行（平律）（唱歌）
3月	○学ノ道（ㇿ律）（唱歌）（作詞者不詳）
4月9日	○墨繩（平律）（唱歌）（作詞者不詳） ○菊ノカザシ（平律）（唱歌）（作詞者不詳） ○ヤスキタメシ（平律）（唱歌）（作詞者不詳） ○ヨロノオヤ（黄呂）（唱歌）（本居宣長） ○シロカネ（黄律）（唱歌）（万葉集、山上億良）
6月17日	○民草（ㇿ律）（唱歌）（豊田英雄） （Ronge, Peabody, Douai, The Peasant, The Farmer）
7月17日	○天鶴群（ㇿ律）（唱歌）（万葉集、読人不知） ○ヨロヅノコト（黄律）（唱歌）（作詞者不詳） ○ソムカヌ道（盤律）（唱歌）（作詞者不詳）

8 月	○濱ノ眞砂（盤律）（唱歌）（古今集、読 人不知） ○春日山（ㇿ律）（唱歌）（明倫集、入道 前太政大臣女作） ○神恵（平律）（唱歌）（玉鉢百首、本居 宣長） 元ハ早苗（平律）（唱歌）（三草集、少将 源定従） 木毎之花（元ハ早苗と同音）（唱歌）（古 今集、紀友則） ○隅田川（双律）（唱歌）（後琴集、村田 春海） ○鹿島ノ神（黄律）（唱歌）（万葉集、大 舎人 千文） ○オモウドチ（盤律）（唱歌）（捨遣集、 平兼盛） 園ノ遊（ㇿ律）（遊戯歌）（作者不詳） 兄弟ノ友愛（平律）（唱歌）（豊田英雄訳） (Douai, The Happy Home Brothers Love) 子の遊（平律）（唱歌）（琴後集、村田春 海） 苗代水（黄律）（唱歌）（明倫集、橘為仲） 野山之遊（盤律）（遊戯歌）（豊田英雄訳） (Ronge, Peabody, The Rovers) 学道（唱歌）（皇后宮） 神ノ道（ㇿ律）（唱歌）（明倫集、為盛朝 臣） △筍（ㇿ律）（唱歌）（村田春門） ミチノク山（平呂）（唱歌）（萬葉集、大 伴家持） カヒアルチヨ（平律）（唱歌）（明倫集、 橘枝直） 梓弓（双呂）（唱歌）（明倫集、平春庭）	夏山 ㇿ呂（唱歌）（金葉集、慈円） 山時鳥 黄律（唱歌）（近藤濱）（Ronge, Peabody, Cuckoo） コガヒ（唱歌）（拾遺集、兼盛） 養蠶 盤律（唱歌）（作者不詳） 春ノ山辺（唱歌）（古今集） 去冬ノ雪（ㇿ律）（夏山同音）（唱歌）（続 後撰集、前関白左大臣） 唐琴ノ浦（双呂）（梓弓同音）（唱歌）（古 今集、素性法師） 明石ノ浦（ㇿ律）（春日山同音）（唱歌） （柿本人麿） 梢ノ藤（ㇿ律）（天鶴群同音）（唱歌）（橘 千陰） 木毎ノ花（平律）（元ハ早苗同音）（唱歌） コホロギ（ㇿ律）（瀧ノ糸同音）（唱歌） （萬葉集、読人不知） 山下水（黄律）（夏山同音）（唱歌）（拾遺 集、紀貫之） 堤ノ雲（盤律）（思フトチ同音）（唱歌） （村田春野） 二見ノ浦（ソムカヌ道同音）（唱歌）（藤 原兼輔） 四季（双・黄・平・盤律）（遊戯歌）（近 藤濱） Douai, Winter's End, Summer, Autumn)
	10月7日	明治13年 5月20日
	11月3日 11月27日	6 月
	明治12年 1月16日	明治15年 3 月
2 月 5 日	ウナヒノミチビキ（ㇿ律）（唱歌）（豊田 英雄訳）(Douai, The Child's Greeting) 教ノ道（平律）（唱歌）（豊田英雄訳） 露ノ光（平律）（唱歌）（作詞者不詳） サザレイシ（双呂）（唱歌）（古今集） 富士山（盤律）（唱歌）（万葉集、山辺赤 人） 春ノ山辺（双律）（唱歌）	上申の日時が明らかにされていないもの
	5 月10日	
	7 月	
	9 月13日	
盲想（平律）（遊戯歌）（豊田英雄訳） (Douai, Guessing the Singer) 窮鼠（黄律）（遊戯歌）（豊田英雄訳） (Douai, Cat and Mouse) 学校往来（ㇿ律）（唱歌）（豊田英雄訳） (Douai, Homeward) 人ノ道（ㇿ律）（唱歌）（豊田英雄訳） (Peabody, Lord's Prayer) 桜ヲ読ル（双呂）（唱歌）（橘千陰） 王昭君（盤律）（唱歌）（村田春海） △造化ノ妙（唱歌）（近藤濱） △盲想ノ遊（黄律）（唱歌）（豊田英雄訳） （近藤濱撰譜、芝葛鎮訂）(Douai, Guessing) 民草（遊戯歌）（豊田英雄） 瀧ノ糸 ㇿ律（唱歌）（千載集、盛方）	唱歌	大和撫子（ㇿ律）（唱歌）（権掌侍、税所 敦子） 若紫（ㇿ律）（唱歌）（権命婦、平尾歌子） 君が代（ㇿ律）（唱歌）（古今集、君が代） ウミユカバ（ㇿ律）（唱歌）（万葉集、大 伴家持） 六ノ球（平律）（唱歌）（豊田英雄） (Ronge, 25、26、27、28) 赤色（平律）（唱歌）（豊田英雄） 黄色（平律）（唱歌）（豊田英雄） 青色（平律）（唱歌）（豊田英雄） 柑色（平律）（唱歌）（豊田英雄） 緑色（平律）（唱歌）（豊田英雄） 紫色（平律）（唱歌）（豊田英雄） 元色（平律）（唱歌）（豊田英雄） 間色（平律）（唱歌）（豊田英雄）

遊戯歌	倭心（平律）（唱歌）（水戸斎昭） 山吹（唱歌）（作詞者不詳） 兎（遊戯歌）（作詞者不詳）（Ronge, Peabody, The Hares） 遊行（遊戯歌）（作詞者不詳）（Ronge, Peabody, The Wheel-barrow） ウミユカバ（老律）（遊戯歌）（作詞者不詳）
-----	--

- ii) 松野クララによるピアノ伝習についての再上申。
これによって、式部寮における伶人の洋琴（ピアノ）伝習が正式に許可された。

明治十二年三月十四日

先年来伶人へ欧州楽伝習被命一同勉強罷在候処元来欧楽音律之調査新曲撰譜等ニ於テハ洋琴相学ヒ不申候而者精密之調難出来候然ルニ保姆松野クラ、儀者奥国人ニテ該洋琴練熟之趣ニ候処幸幼稚園唱歌伝習之因モ有之ニ付同人ヨリ伶人へ相伝候様仕度依之前同人ヨリ内議候処授業人四人ニテ壹ヶ月拾ヶ度毎度一時間ノ授業被相定月謝金貳拾円ヲ以相伝可到之趣ニ付左之四名へ伝習被命候様仕度此段奉伺候也

一等伶人 芝 葛鎮

二等伶人 東儀季芳

四等伶人 奥 好義

御用掛 小條秀一

『東京芸術大学百年史・東京音楽学校編』（pp.270-271）

- iii) 「明治十一年、東京女子師範学校で新しい時代の子どもに歌わせる唱歌教材の作成を思い立ち、と言って他に適当なところもないので、その制作を宮内省式部寮雅楽課に依頼した。雅楽課も時代の息吹を感じ、現代的なものをと努力したにちがいない。それが『保育唱歌』百余曲で、「風車」はその筆頭に当たるもので、歌詞は口語では品を落とすと思って文語で和歌の形式をとって作ったものと思われるが、なるべく子どもにわかりやすく、題材と表現を考えたあとが見え、ほほえましい。曲は雅楽の律音階で、催馬楽の曲を単純化した趣があり、おもしろい。たわいないものであるが、はじめて作る子どもの教育的な歌とあっては苦心したものであろう。」（金田一・安西『日本の唱歌（上）明治篇』p.20）

引用・参考文献

- 江崎公子編 1991「芝祐泰編『保育並遊戯唱歌の撰譜』全六巻」『音楽基礎研究文献集15巻』大空社 pp.20-31.
- 藤田美美子 1978 「保育唱歌研究—フレーベル式幼稚園唱歌遊戯移入の経過を中心として—」『国立音楽大学創立五十周年記念論文集』国立音楽大学 pp.329-369.
- 曾我芳枝 2008 「唱歌遊戯の成立過程に関する研究：『雅楽録』にみられる「保育唱歌」の作成過程から」『体育学研究53（2）』pp.297-313.
- 塚原康子 2009『明治国家と雅楽 伝統の近代化/国楽の創成』有志舎 pp.114-134.
- 中村理平 1993『洋楽導入者の軌跡—日本近代洋楽史序説—』刀水書店
- 前原晃・高橋清賀子・野里房代・清水陽子 2010『日本人幼稚園保姆第一号豊田英雄と草創期の幼稚園教育』建帛社
- 塚原康子 1996『十九世紀の日本における西洋音楽の受容』多賀出版
- 吉田孝 2011『毫モ異ナル所ナシ 井澤修二の音律論』関西学院大学出版会 pp.170-174.
- 『東京芸術大学百年史・東京音楽学校編』 pp.270-271.
- 金田一春彦・安西愛子 2009『日本の唱歌（上）明治篇』講談社文庫 p.20.
- 倉橋惣三・新庄よし子 1983『日本幼稚園史』臨川書店 pp.244-247.
- 東ゆかり 2014「保育唱歌「六球」の歌詞推敲について—豊田英雄の自筆文書から—」『鎌倉女子大学紀要第21号』pp.31-41.
- 東ゆかり 2015「保育唱歌におけるフレーベル主義—豊田英雄の文書を中心に—」『鎌倉女子大学学術研究所報』第15号 pp.73-79.
- 東ゆかり 2016「保育唱歌におけるフレーベル主義—豊田英雄の文書を中心に—」『鎌倉女子大学学術研究所報』第16号 pp.31-41.
- ## 要旨
- 本研究は、初期の「保育唱歌」の訳詞や作詞をおこなった東京女子師範学校附属幼稚園保姆の豊田英雄が書き残した自筆の文書の解読を通して、作曲者である宮内省雅楽課式部寮伶人たちの立場

からの「保育唱歌」作成のプロセスを検討することにある。その結果、幼稚園の唱歌遊戯の教材作成を目的として始まった「保育唱歌」の作曲は、東京女子師範学校本科の生徒、さらに不特定多数の聴衆を対象にした演奏会プログラムなど、適用の範囲が広がっていく中で質的変容を遂げていったことが明らかになった。

(2016年9月12日受稿)